

今年にはいって、教えをうけた私の先生のお祝いの会が三つ続いた。小島吉雄先生の米寿の会、犬養孝先生の受賞祝賀の会、林和比古先生の傘寿の会であった。蒙った学恩をあらためて謝しながら、二十年以上昔の学生時代を思いおこしたことであった。小島先生の文学の正道、研究の正道を大坂弁で熱っぽく説かれる姿や、犬養先生のみずみずしい文学的感性、林先生のきびしい諸説批判等が昨日の如くによみがえってくる。お三人の個性や学風がそれぞれに違っていた分、よけいに際立ってよみがえってくる。真淵は門下に対すること我子に対する如くであり、俊敏というよりは重厚の人ながら、一切を洞察する鋭い直観力の学者であったという。宣長は学問において師説として之に拘むべからずと説く、自由にして進歩的なる研究精神の人と聞くし、秋成は独学

ながら鋭い独自の論を展開して宣長との論争にはげしい気迫が感じられる。会うことのない遠い昔の学者であるが、私には無性に魂力を感じる存在で、先のお三人を江戸の和学者三人の一端にふりあてて、今に想像してみたりもした。あれがよしこれがよしということではなく、個性それぞれの先生の教えを受け得たことをありがたく思うのである。

わが日本文学会でも多くの先生の教えを受け、その精神は会員諸兄の中に脈々と流れている。清水泰先生や後藤丹治先生の警咳に接することは私にはなかつたが、古い会員からつねづね聞くところであるし、国崎望久太郎、和田繁二郎、鷹津義彦先生らの教えはまだ記憶に新しく、会員の学問を叱咤しつつけている。それぞれに个性的ながら、それでいて一つの流れとなつて、日本文学会は今日まで

支えられてきた。加うるに、本年三月松前健先生が停年の時をむかえられた。先生の学問と業績は別に編れる立命館文学記念論集に詳しいので、ここでは差し控えるが、国の内外を問わぬ該博で深い先生の蘊蓄は学生に感銘を与えつつけてきたところである。が、何よりもまして、学問を通してのお人柄は教えをうけた者全ての心にいつでも焼き付いていることであろう。学問は人なりということばを想うことである。今後とも変らず御指導をいただきたいと願うものであるが、それにつけ南山の寿を切に祈り申し上げる。

伴利昭